

一番茶期のチャもち病の効果的防除法

杉山喜直・中村晋一郎・久保田 朗 (福岡県農業総合試験場八女分場)

Yoshinao SUGIYAMA, Shin-ichiro NAKAMURA and Akira KUBOTA : Control of Blister Blight, *Exobasidium vexans* Masee, on 1st Tea Season

一番茶期のもち病の防除は、感染時期の把握が難しく適期防除が困難である。しかし、最近、もち病の防除法として銅水和剤の萌芽前散布が効果的であることが報告された¹⁾。

そこで、一番茶期のもち病の効果的な防除法を明らかにするために、萌芽前の殺菌剤の散布がもち病の発生に及ぼす影響を検討した。

1. 試験方法

試験は煎茶園と玉露園で実施した。試験規模は、1区5m²の3区制とし、殺菌剤の散布は第1表のとおり、各期日に1回行った。散布量は煎茶園は200l/10a、玉露園は200l/10aと400l/10aとした。調査は、5月15日(煎茶園)と22日(玉露園)に区内の全発病葉の病斑数を計測した。なお、煎茶園、玉露園ともに萌芽期は4月17日頃であった。

2. 結果及び考察

1) 煎茶園

第1図に無散布区に対する病斑数の比率を示した。無散布区の病斑数は、24.8個/m²であった。

銅水和剤の場合、病斑数は2月27日と3月29日に散布した区が少なかったが、4月17日以降に散布した区は多く、特に4月26日に散布した区は無散布区より多かった。

一方、トリアジメホン水和剤の場合、4月17日、26日に散布した区は少なかったが、3月29日に散布した区は無散布区より多かった。

以上の結果から、一番茶期のもち病に対する銅水和剤

の効果は、萌芽前の散布が高く、萌芽期以降の散布は低いことが明らかになった。一方、トリアジメホン水和剤の効果は、萌芽期以降の散布が高く、萌芽前の散布は低いことが明らかになった。これは、もち病菌のチャへの感染時期が、萌芽期頃であるために、銅水和剤の特性である感染前の予防効果とトリアジメホン水和剤の特性である感染後の治療効果の違いが顕著に表れたものと考えられている¹⁾。

2) 玉露園

第2図に無散布区に対する病斑数の比率を示した。無散布区の病斑数は54.0個/m²であった。

200l散布区の病斑数は、2月27日と3月29日に散布した区が少ない傾向を示したが、無散布区に対する差は小さかった。

一方、400l散布区の病斑数は、200lの散布区よりも少なく、無散布区に対する差は大きかった。特に、2月27日と3月29日に散布した区が少なく、煎茶園の場合と全く同様の傾向が認められた。

以上の結果から、玉露園においても、煎茶園と同様に銅水和剤の萌芽前散布の効果が高く、散布量の違いによる効果の差が大きいことが明らかになった。玉露園の場合、茶芽の配置が煎茶園よりも立体的であり、下位葉まで萌芽、生育するため、煎茶園と同等の200l/10a散布では、茶芽の薬液付着程度が不均一となり、効果が不十分となると考えられる。

3. まとめ

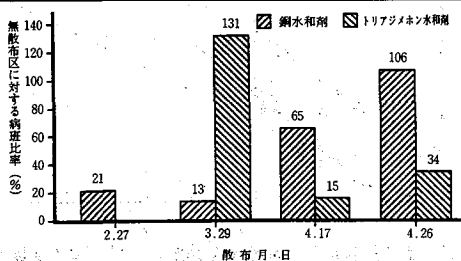
一番茶期のもち病防除には、銅水和剤の萌芽前散布が有効であった。萌芽前防除は散布適期の幅が広く、摘採する新芽への農薬汚染もなく防除効果が安定している。従って、一番茶期のもち病防除は煎茶園、玉露園ともに銅水和剤による萌芽前の防除が最良であると考えられる。

引用文献

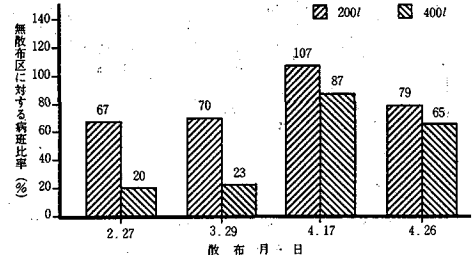
- 1) 安藤康雄：野菜・茶業研究成果情報, 16.1990.

第1表 試験区の構成

茶園	薬剤名	倍数	散布月日			
			2/27	3/29	4/17	4/26
煎茶園	銅水和剤	500倍	○	○	○	○
	トリアジメホン水和剤	2000倍		○	○	○
玉露園	銅水和剤	500倍	○	○	○	○



第1図 殺菌剤の散布時期ともち病の発生 (煎茶園)



第2図 銅水和剤の散布時期・散布量ともち病の発生 (玉露園)